

## 第2章 文化財の概要

### 1. 指定・登録文化財の概要

日野町では、文化財保護法、鳥取県文化財保護条例、日野町文化財保護条例などに基づき、指定・登録された文化財が13件あります(表2-1)。内訳は、有形文化財のうち建造物は県指定1件、町指定1件、国登録2件、美術工芸品は彫刻の国指定が3件、町指定が1件、書跡・絵画の町指定が1件です。記念物のうち、遺跡は県指定が1件、動物・植物は県指定が3件です。

表2-1 日野町内の指定・登録文化財


種別		国		県	町	計
		指定等	登録			
有形文化財	建造物	0	2	1	1	4
	美術工芸品	3	0	0	2	5
無形文化財		0	0	0	0	0
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	0	0	0	0
	無形の民俗文化財	0	0	0	0	0
記念物	遺跡	0	0	1	0	1
	名勝地	0	0	0	0	0
	動物、植物、 地質鉱物	0	0	3	0	3
伝統的建造物群		0	—	—	—	0
文化的景観		0	—	—	—	0
計		3	2	5	3	13

※「—」は制度が無いことを示す

国重要文化財

写真		
文化財類型	有形文化財（美術工芸品）	
名称	木造薬師如来及び両脇侍像	
時代	平安後期	
指定年月日	大正9（1920）年4月15日	
所有者	長楽寺	
所在地	下榎	
特徴	檜木材、寄木造。穏やかな面貌、着衣の浅く流麗な衣文表現といった作風は都出来の平安末期の和様彫刻の作風を示す。	
写真		
文化財類型	有形文化財（美術工芸品）	有形文化財（美術工芸品）
名称	木造毘沙門天立像	木造不動明王立像
時代	平安後期	平安後期
指定年月日	大正9（1920）年4月15日	昭和17（1942）年12月22日
所有者	長楽寺	長楽寺
所在地	下榎	下榎
特徴	檜木材、寄木造。顔の目鼻立ちが小作りで、体の動きも全体的に抑えられていて平安末期頃の作と考えられている。	檜木材、寄木造。全体的に動勢が抑えられており、面貌の表情も平安末期頃の作と考えられる。

鳥取県指定保護文化財

写真		
文化財類型	有形文化財（建造物）	
名称	近藤家住宅	
時代	江戸後期～明治初期	
指定年月日	平成 30（2018）年 10 月 9 日	
所有者	個人	
所在地	根雨	
特徴	主屋、土蔵等計 10 棟で構成されている。家相図と合わせ、製鉄業の繁栄の中で増改築を繰り返した経緯が確認できる歴史的に価値の高い建造物である。	

鳥取県指定天然記念物

写真		
文化財類型	記念物（植物）	記念物（植物）
名称	聖神社社叢	根雨神社社叢
時代	—	—
指定年月日	昭和 57（1982）年 4 月 9 日	昭和 59（1984）年 2 月 21 日
所有者	聖神社	根雨神社
所在地	黒坂	根雨
特徴	シラカシ、ウラジロガシを中心に自然性の高い樹木が保全されている。	日野郡では数少ないシラカシやウラジロガシなどを残す。

鳥取県指定天然記念物

写真	
文化財類型	記念物（動物・植物）
名称	荒神原のオオサンショウウオ生息地
時代	—
指定年月日	昭和 61（1986）年 12 月 2 日
所有者	個人
所在地	上菅
特徴	昭和 48 年調査で 98 匹を確認、その後の調査で幼生や卵も確認された。

鳥取県指定史跡

写真	
文化財類型	記念物（遺跡）
名称	都合山たたら跡
時代	明治中期
指定年月日	令和元（2019）年 10 月 23 日
所有者	日野町
所在地	中菅
特徴	原料搬入から製造、製品搬出まで、砂鉄洗い場、高殿、鉄池、銅場、鍛冶場などの各施設が機能的に配置されている。俵国一調査と発掘調査により遺跡の復元検討が可能な学術的に重要な製鉄遺跡である。

日野町指定有形文化財

写真		
文化財類型	有形文化財（建造物）	有形文化財（美術工芸品）
名称	本陣の門	長楽寺の十二神像
時代	江戸後期	鎌倉時代
指定年月日	昭和 54（1979）年 10 月 31 日	昭和 54（1979）年 10 月 31 日
所有者	日野町	長楽寺
所在地	根雨	下榎
特徴	本陣を務めることにより設置することができた門で、屋根は粉板を重ねた「こけら葺き」となっている。	像高は 85～90cm 程度で甲冑を身に付け、武具を持つ武将の姿を表している。頭には十二支を載せている。

日野町指定有形文化財

写真	
文化財類型	有形文化財（美術工芸品）
名称	泉龍寺の因藩二十士遺品
時代	江戸後期
指定年月日	昭和 54（1979）年 10 月 31 日
所有者	泉龍寺
所在地	黒坂
特徴	河田左久馬や詫間樊六など幕末期鳥取藩士 20 名の武具や書、文机などの遺品で、藩士の志や内面を伺い知ることができる。

国登録有形文化財（建造物）

写真		
文化財類型	有形文化財（建造物）	有形文化財（建造物）
名称	日野町歴史民俗資料館 （旧根雨公会堂）	佐々木家住宅
時代	昭和初期	江戸後期／明治中期・昭和前期改修
指定年月日	平成9（1997）年5月7日	平成29（2017）年10月27日
所有者	日野町	個人
所在地	根雨	舟場
特徴	木造瓦葺一部二階建てで、外観が周辺町並みに調和するように質素に建設されている。	主屋、蔵など4棟から成る旧家で、旧出雲街道に面し、松江藩参勤交代を支援した。

日野町内の指定・登録文化財の位置

長楽寺仏像群



①薬師如来及両脇侍像



②毘沙門天立像



③不動明王立像



④十二神将像



⑤近藤家住宅



⑥本陣の門



⑦歴史民俗資料館（旧根雨公会堂）



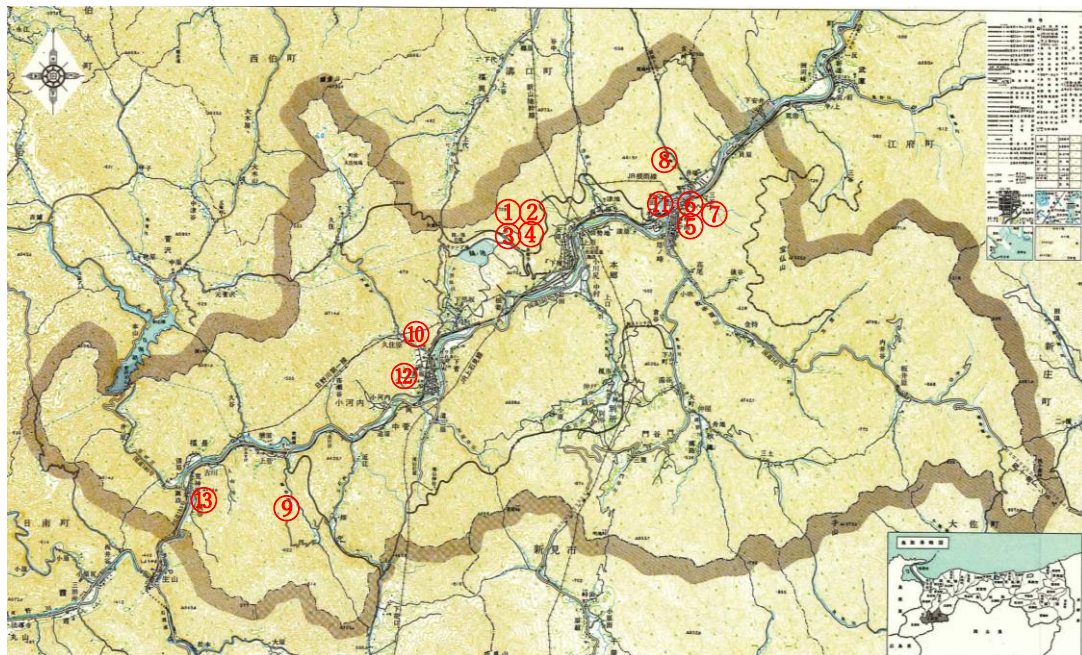
⑧佐々木家住宅



⑨都合山たたら跡



⑩因藩二十士遺品



⑪根雨神社社叢



⑫聖神社社叢



⑬荒神原のオオサンショウウオ生息地

## 2. 未指定文化財の概要

町誌や既存の調査などによって、令和4年11月1日現在、349件の未指定文化財を把握しました。

表2-2 未指定文化財の件数と内容

文化財類型	種類	件数	内容
有形文化財	建造物	51	町家、近代化遺産（銀行建築、公会堂、駅舎、橋、発電所）、石造物
	美術工芸品	27	彫像、古文書、絵画、模型、弓、衣類片等
民俗文化財	有形の民俗文化財	2	民具
	無形の民俗文化財	51	行事・祭り、民謡、食文化
記念物	遺跡	186	製鉄跡、古墳、城館、神社、寺院
	動物・植物・地質鉱物	13	侵食地形、滝、岩石、植生、昆虫、生息地
文化的景観		3	明地峠の眺望、たたら街道、黒坂の町並み
伝統的建造物群		3	出雲街道の風景
その他（ジゲのたから）		13	方言、伝承・伝説
合計		349	

文化財リストとして掲載

## 3. 類型ごとの概要と特徴

### (1) 有形文化財

#### ○建造物 町家

根雨には、たたら製鉄に係る建造物が多くあり、その中の1つである近藤家住宅は鳥取県指定保護文化財となっています。近藤家は江戸後期から大正期まで根雨に居宅を構え、日野郡一帯で製鉄業を行った鉄山師です。近藤家住宅は主屋、土蔵等計10棟で構成されており、築年代は江戸後期から明治にかけてのもので、同家に残されている家相図<sup>かそうず</sup>やその他史料により屋敷の増改築の変遷をたどることができます。製鉄業の繁栄とともに増改築を繰り返した経緯が確認できる歴史的にも価値の高い建造物です。また、旧出雲街道に面した



日野町公舎（旧出店近藤）

た主屋の二階座敷は、その形成過程において鳥取県内でも比較的早い段階のものと推察できる町家建築と考えられます。

未指定の建造物として近藤家が建造・設立に関わっているものに、日野町公舎（旧出店近藤）や旧山陰合同銀行根雨支店などがあります。

日野町公舎（旧出店近藤）は近藤本家（上近藤家）より分家した清右衛門によって興され、現建造物は明治初期のもので、二列型間取りで漆喰壁やむしこ窓や格子など江戸時代の町家建築の面影を残しています。



そのほか、近世宿場町の歴史を偲ぶ建造物として本陣の門が現存しています。もともとは、現在の位置から北側約 100m の街道中央に所在していたものですが、現在の位置に移築されました。元禄期の紀行文『伯陽六社みちの記』には根雨本陣について「美尽し給ふ事いふもさら也。其のつぎつぎの間所いとひろく、供奉の人いくばくありとも、所せきさまにあらじと覚ゆ。御調度共、名もしらぬ物おほし。鷹部屋・厩・下部のふしどまで、めもあやにて見つくしがたく」と本陣内部の様子を記載しています。門屋根は粉板<sup>へぎいた</sup>を重ねた「こけら葺き」で、門金具には八双金物<sup>はっそうかなもの</sup>などの意匠が見られます。根雨の宿場町の歴史を物語る文化財として、町指定文化財となっています。

舟場には国登録有形文化財の佐々木家住宅があります。主屋・新座敷・新蔵・穀蔵で構成され、江戸後期から明治後期にかけての建造物です。同家は出雲街道沿いに所在し、街道整備や休憩所の提供など松江藩の参勤交代に尽力した旧家であることが伝わっています。

## ○建造物 近代化遺産

旧山陰合同銀行根雨支店は、近藤家が明治 30 (1897) 年に設立した根雨銀行を前身とし、その後、雲陽<sup>うんよう</sup>実業銀行根雨支店を経て、松江銀行根雨支店、山陰合同銀行根雨支店と変遷をしてきました。旧山陰合同銀行根雨支店の建物は昭和 4 (1929) 年に雲陽実業銀行根雨支店



旧山陰合同銀行根雨支店

として建築されたもので、木造でありながら外観は石造り・レンガ風の洋風建築に見せ、出雲街道に面した建物正面は左右対称に 3 分割し、中央のペディメント（破風）内には紋章を付け、屋根軒裏にはコーニス（蛇腹）やデンティル（歯飾り）などの西洋建築を表現しています。内部は吹き抜けとなっていて、天井は折り上げ天井となっています。「たたら文化」を物語る建造物として、根雨のまちなみの重要な構成文化財です。

国登録有形文化財である日野町歴史民俗資料館は、昭和 15 年（1940）年に近藤家 7 代寿一郎が根雨公会堂として建造し、当時の根雨町に寄贈したものです。設計は当時著名な岡田孝雄氏によるもので、演劇、映画、講演会、諸会合など幅広く利用されてきました。当館は昭和 61（1986）年に資料館として改装し、民具を中心とした資料の保管・展示を行う歴史民俗資料館として運営しています。本建造物も近藤家のたたら経営がもたらした文化財であり、根雨の町の文化・教育等の普及啓発に寄与した歴史を物語ります。



根雨駅舎

鉄道の停車駅舎として大正 11(1922)年開業の根雨駅、黒坂駅、大正 14 (1925) 年開業の上菅駅があります。これらは、大正 5 (1916) 年の米子根雨間軽便鉄道の着工により順次整備され、上菅駅は地元住民の請願により置かれました。根雨駅舎は、主屋である待合室・事務室が平屋建・切妻造で、入口に車寄せが付けられています。駅舎側プラットフォームに上屋を設け、跨線橋を付け、駅舎反対側にも旅客上屋が置かれており、大正時代から

現代までのさまざまな施設が併存する地方の小規模駅舎の典型的な景観をあらわした建造物です。

根雨の板井原川に架かる祇園橋は、昭和 8 (1933) 年に建造された鉄筋コンクリートの橋梁で、根雨神社参道ともなっています。近代的な T 型三連桁橋と高欄・擬宝珠付親柱・石灯籠などの造作の対照性が特徴です。



祇園橋

下黒坂に設置されている昭和 15 (1940) 年建造の黒坂発電所は、山頂部の鶴ノ池を貯水池として稼働している水力発電所です。

山肌に取り付けられた水圧鉄管と発電所で構成されます。発電所内は発電機室、遮断機室、配電盤室を配し、発電機室は外観 2 階建ですが、内部は吹き抜けの 1 室となっています。また、遮断機室は外観平屋ですが、中 2 階・半地下となって発電機室と接続し、さらに一部で地下 2 階を持つ複雑な構造となっています。



黒坂発電所

### ○建造物 石造物

黒坂の陣屋跡から北西側約 300m の山麓に、江戸時代を通じて黒坂支配を行った福田氏の墓地があります。福田家の 4 代・久武<sup>ひさたけ</sup>と 8 代・久寧<sup>ひさやす</sup>、家老の山上半太夫の墓があります。福田氏は「御地頭様」と呼ばれており、普段は鳥取に住み、黒坂には城奉行などが政治を司っていました。福田氏代々の墓は鳥取の一行寺<sup>いちぎょうじ</sup>にありますが、久武<sup>ひさたけ</sup>と久寧<sup>ひさやす</sup>は遺言により分骨され、黒坂に埋葬されたと伝わっています。

### ○美術工芸品 彫像

下榎地区の長楽寺に国重要文化財である木造薬師如来及び両脇侍蔵、木造毘沙門天立像、木造不動明王立像が所蔵され、本町の仏教文化の一端を伝えています。木造薬師如来及び両脇侍像については、三尊とも檜材を用いた寄木造りで、穏和な面貌、着衣の浅く流麗な衣文表現といった作風は都出来の平安末期の和洋彫刻として位置付けられています。ただ、薬師如来の丸顔面貌に目尻りを少し上げたやや厳しい眼差しの両目が刻まれている点や両脇侍像の強い腰の捻りなどは鎌倉彫刻の要素も含むものと考えられています。

木造毘沙門天立像は檜材の寄木造りで、左手に宝塔をかかげ、邪鬼の上に立っています。顔の目鼻立ちが小作りで、体の動きも全体的に抑えられていて平安末期頃の作と考えられています。鎌倉初期彫刻の太造りの造形が認められる点もあり、平安末期から鎌倉初期の過渡的なものという見方もあります。

木造不動明王立像は檜材の寄木造りで、全体的に動勢が抑えられており、面貌の表情も平安末期頃の作と考えられています。

『日野郡史』には薬師如来の像内銘として「奉祈願 長谷部氏某申 此度之病患速療武運長久子孫繁栄 于時文治元年 乙四月八日 長兵衛尉信連敬白」とあり、長谷部信連による寺院の再興と祈願の歴史がみられる仏像群です。

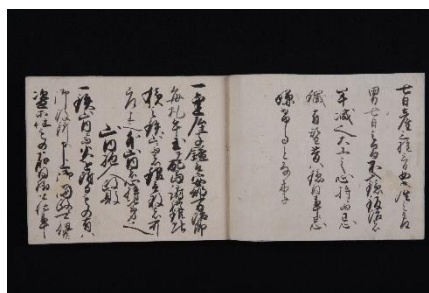


4代筑後久武の墓

### ○美術工芸品 古文書

古記録として、「鉄山要口譚」や「近藤家文書」など、製鉄業に関わる史料が多くあります。鉄山要口譚は、製鉄業の仕方や習俗を記した「鉄山必用記事」の草稿の写しと言われており、近世中～後期頃の製鉄業を知る重要な史料です。

近藤家文書は、近世後期～大正期の鉄山師近藤家の製鉄業経営に関わる記録、大庄屋に関わる記録などで構成される文書群です。近世たたら経営の実態や明治期洋鉄参入時の対応など、当地域の製鉄業の変遷、たたら経営に関わる多くの地域住民の歴史を知るのに貴重な史料群です。



鉄山要口譚

### ○美術工芸品 絵画

絵画史料として、長楽寺本堂の格天井には、江戸中期の絵師である法橋索準による花鳥画が描かれています。絵画の構図などから狩野派の絵師と見られています。



長楽寺格天井の花鳥画

そのほかに日本画家のこばやかわしゅうせい小早川秋聲（1885～1974）・好古（1890～1971）や、洋画家・漫画家のきやまよしと木山義喬（1885～1951）の絵画があります。小早川秋聲は京都画壇で活躍したほか、日中戦争が始まると従軍画家として戦地に赴任しました。代表作「國之盾」などで知られています。日野町には「終生不倒」「露営の図」「山中鹿之助三日月を拝するの図」が所蔵されています。

木山義喬は根雨生まれの洋画家・漫画家で、絵画研究のため渡米して、帰国後、昭和6（1931）年に「漫画四人書生」を発行しました。当時のアメリカの世相や出来事が取り入れられており、歴史資料としても貴重な作品として知られています。木山は根雨で出会った人々を描いた風刺画も残しており、当時の町の活気や様子などを知ることができる史料です。

### ○美術工芸品 その他

後醍醐天皇隠岐配流の際に、板井原に残され伝承しているものとして、後醍醐天皇御衣片と池田将監の弓があります。後醍醐天皇御衣片は、元弘2（1332）年隠岐配流時に後醍醐天皇が召していた御衣の一片と伝えられ、長さ1.7cm余り、幅6.6mm余りの錦の織物です。これは天皇の侍医池田将監と板井原で別れる際に下賜されたものと伝承しています。池田将監の弓は、池田将監が愛用していた弓として伝承しています。

泉龍寺の因藩二十士遺品は、近世後期の京都本圀寺で事件を起こした鳥取藩士たちの遺品で、泉龍寺幽閉時のもの計32点から成ります。遺品は藩士の書や文箱、文机、短銃や木刀、竹刀などから成り、藩士の志と混迷した幕末の様相を物語る資料です。

高殿模型は、都合山たたら跡の製鉄炉を再現した丸打高殿の模型です。昭和21（1946）年、日立製作所安来工場の付属施設として開館した和鋼記念館（現在の和鋼博物館）の展示の目玉として安来市の人形作家青戸鉄太郎氏が制作したもので、屋根や建物内部の製鉄炉、天秤鞆、木炭を置く「炭町」、砂鉄を置く「小鉄町」などが精巧に再現されています。後に伯耆国たたら顕彰会へ寄贈され、現在、日野町歴史民俗資料館分館で展示しています。



根雨の人々を描いた  
風刺画「第五組夏夜風景」



高殿模型

## (2) 民俗文化財

### ○有形の民俗文化財

#### 民具

歴史民俗資料館では、江戸時代後期から昭和時代にかけて、庶民生活で日常的に使用されてきた各種道具類を収蔵・展示しています。その資料の大半は地域住民の寄贈によるもので本町の暮らしぶりや生活様式を示す資料が多くあります。現在確認できているもので1,785点あります。



歴史民俗資料館の民具類

### ○無形の民俗文化財

#### 行事・祭り

日野町内の各自治会などを主な活動単位として、各種行事が確認されています。金持の青年会は昭和55(1980)年から元旦に獅子舞を始めました。金持神社で舞を奉納した後、家々を「家内安全」と唱えて回っています。

菅福地区では途絶えていた伝統行事「ほとほと」を平成14(2002)年から復活させまし

た。ほとほとは正月に行う厄落とし行事で、厄年を迎える家を神の使い「ほとほと」が訪れ、縁起物を置いていきます。「ほとほと」が帰路につくところを準備しておいた冷水を浴びせかけて厄を落とす行事です。

家内安全やその一年の無病息災を祈願する「とんどさん」は、町内各地域で行われています。黒坂のとんどは、正月飾りや書初め等のとんど焼きがかつては町内でも特に高く積み上げられ行われていました。

祭りとして、根雨では毎年7月に「ねう祭り」が行われ、自治会による踊りと花火、10月には秋祭りの神輿が出てにぎわい、町の風物詩となっています。また、黒坂では8月に黒坂納涼まつりが開催されているほか、各自治会での祭りも行われています。なお、これらの祭りで踊る「日野町音頭」や「傘踊り」は大人から子どもたちへ継承されてきた伝統的な踊りです。



金持獅子舞



ほとほと



とんどさん（黒坂）



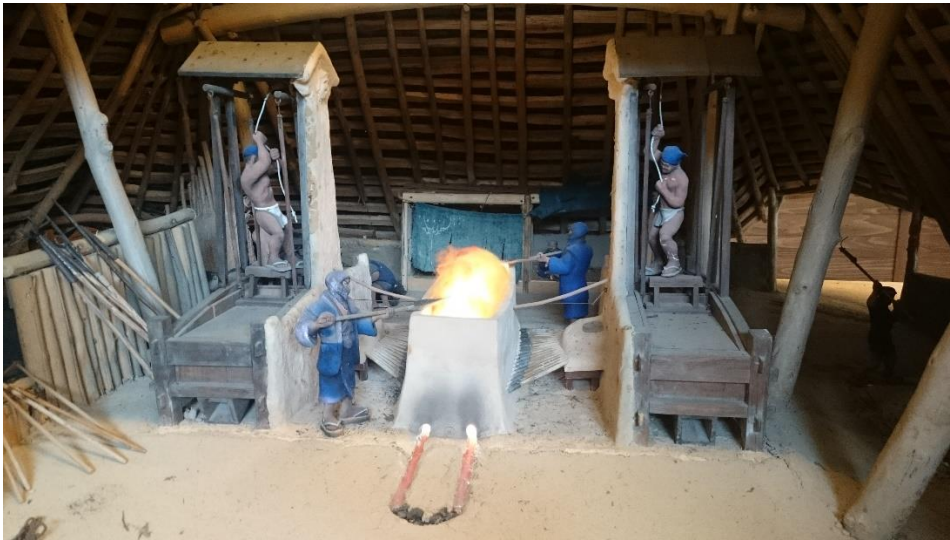
ねう祭り 日野町音頭



黒坂納涼まつり 傘踊り

## 民謡

昭和 63 (1988) 年の民謡調査で、諸職に関する労作歌の中で番子歌が確認されています。番子は、製鉄炉に風を送る装置である鞆ふいごを踏む職人で、三日三晩続けられることから、複数人の番子が待機しており、交代でその業務にあたりました。そのことから「代わり番子」という言葉は、この作業に由来しているという説があります。番子は三日三晩続く作業を、番子歌を歌いながら仲間や自らを励まし、なぐさめながら行っていたものと思われます。



製鉄炉両脇に設置された鞆を踏む二人の番子  
たたら製鉄模型 (伯耆国たたら顕彰会所蔵)

## 食文化

じゃぶ汁は、大根、人参、里芋、肉、きのこなど、様々な地元食材が入った料理で、郷土料理として親しまれてきました。「じゃぶ」とは、余り物や余った食材をごった煮するなどの意味であるという説がありますが、多くの栄養素を摂取する庶民料理として本地域の伝統的な食文化として伝えられてきました。じゃぶ汁は地域によって入れる食材はさまざまのようです。



じゃぶ汁

### (3) 記念物

#### ○遺跡

上菅荒神原遺跡(日野町上菅)は河岸段丘上に立地する縄文時代早期から弥生時代中期にかけての遺構で、その各時代の型式の土器が出土しており、その出土量によって消長しながら断続的に利用されてきた場所であると考えられています。住居跡としてピットが多数検出され、竪穴の痕跡が確認できないことから平地住居であったと考えられ、円形および楕円形の壁立式平地住居 14 棟、方形の梁間 1 間型平地住居 2 棟、円形の伏屋式平地住居の存在が推定されています。

岩田遺跡(菩提寺遺跡)では、弥生時代中期～後期のものと推定される円形と方形の竪穴住居跡各 1 棟、古墳時代前期～中期の竪穴住居跡 4～5 棟を検出しています。これらの竪穴住居跡はいずれも重複した形で確認され、弥生時代中～後期の土器、古墳時代前～中期の土師器が出土しています。

本郷に所在する岩田古墳は、封土を失い、横穴式石室が露出しています。石室は花崗岩を使用して構築した両袖式で、奥行 2.35m、奥壁幅は 1.98m、高さ 1.9m、天井には大石が 1 枚のせられており、羨道は約 2m となっています。榎市古墳も封土が失われた状態で横穴式石室のみ現存しています。長さ約 1.3m の羨道を備えた両袖式で、玄室は大石を積み、天井石には大きな 2 つの石があります。

中菅には、明治中期に近藤家が経営した製鉄場跡「都合山たたら跡」があります。遺跡内には砂鉄洗場、高殿(製鉄炉)、鉄池、銅場、鍛冶場 2 箇所、元小屋(事務所)などの鉄生産に関わる遺構が残っています。当時、東京帝国大学冶金学者の俵國一は現地を訪れ、これら施設の図面を記録しています(『古来の砂鉄精錬法』)。平成 20(2008)年に実施された発掘調査の結果、遺構は俵が記した図面とほぼ一致したこと



たたら製鉄の地下構造断面(才ノ原たたら跡)



から、都合山たたら跡は、近藤家に残る経営記録と俵の記録、発掘調査内容という豊富な史料・学術調査によって、当時の製鉄場の復元検討が可能な学術的価値の高い製鉄遺跡であることが分かり、鳥取県指定史跡となっています。

日野町内には野だたらの跡をはじめとする製鉄遺跡が全域に分布しており、人々の暮らしと製鉄業との深い関わりが確認できます。製鉄遺跡は主に日野川及びその支流に近接した平坦面に所在しており、90箇所を確認しています（『日野町遺跡地図』）。

城館は現在23箇所確認されており、多くが地形を利用した中世の山城跡です。黒坂城址は江戸時代初めに関一政が築城したものと伝えられ、黒坂駅の西側にそびえる標高302mの高見山の山頂から麓にかけ、主郭となる曲輪や、櫓台、虎口などの遺構が残されています。築城時期について『伯州黒坂城物語』では慶長18(1613)年、『黒坂開元記抄』では慶長17(1612)年に築城されたと記されています。主郭の東西部分に土塁を築き、南北部分に出入り口として虎口が設けられ、一段低い曲輪と連結しています。南側曲輪の先端には櫓跡が見られます。北側虎口付近などには石材が散布しており、石垣が施されていた可能性があります。関氏の改易と一国一城令の後、黒坂城は廃城となりますが、鳥取藩政の支配拠点として黒坂城東山麓曲輪に陣屋が置かれました。陣屋の遺構として石垣、柵形虎口、井戸跡が残り、石垣は福田氏が構築したものとみられています。

寺院跡として、本町北部の鶴ノ池畔の北面に位置する「鶴の池原遺跡」があります。平安期に七堂伽藍、十二僧房を有する寺院で瑠璃光山薬師寺と号し、平安末期の源平争乱により焼き討ちにされたといえます。同寺院跡や伝承は、長楽寺の由緒や所蔵する仏像群の歴史的背景を見ていく中で重要です。

現在、日野町内には神社が18社（神社庁に登録されたもの）、寺院が10カ寺あります。

根雨神社は日野川と板井原川の合流地点付近にあり、昭和8(1933)年に、根雨地区東方山麓の高尾神社と、根雨字権現鎮座の三谷神社が合祀されたものです。現社殿は宮大工である富次精斎によるもので、向拝の梁には万年青が彫刻されています。一方、根雨神社の旧本殿は、当初形式を大きく損なっていますが、頭貫木鼻や庇の象鼻、正面中備の臺股の形式から、鳥取県内で檜谿神社に次いで古い近世本殿と推定されており、近世初期の県内における流造本殿の浸透を考える上で重要な建造物とされています。

寺院について、根雨の延暦寺、下榎の長楽寺は長谷部信連の開基であると伝わっています。延暦寺の本尊阿弥陀如来は当初、宝仏山の黒岩と呼ばれる地に祀られ、信連が根雨東の堂屋



根雨神社



延暦寺

敷の地へ移して建立したとされます。江戸期に現在地に移され、信連の大位牌を蔵していましたが、明治8(1875)年の火災で焼失しました。明治後期に本堂を再建した十二世大典和尚が漢学者であったことから、日野町貝原出身の文学者・生田長江<sup>いくたちょうこう</sup>は少年時代に延暦寺に通い、漢学の素養を学んだようです。

長楽寺は、文治元(1185)年に長谷部信連によって岩屋の地に再興されたと伝わります。永禄年間(1560~1566年)に現在地に再建されたとみられ、享保15(1730)年に大庄屋の古都源八久富による堂宇修繕が行われるも、寛政2(1790)年の火災で庫裏が全焼しました。本堂の天井に描かれている花鳥図は元禄17(1704)年に、狩野派絵師の法橋索準<sup>ほつきょうさくじゅん</sup>に描かせたものです。

## ○動物・植物・地質鉱物

### 動物

日本の固有種で岐阜県以西の本州、四国、大分県に分布しているオオサンショウウオは、本町域では主に日野川に生息が認められます。オオサンショウウオは世界最大の両生類で「生きた化石」と呼ばれ、日野川では全長60~80cmの個体が多く確認されています。荒神原のオオサンショウウオ生息地は、昭和48(1973)年の調査で98匹を確認、その後の調査でも幼生や卵も見つかり、オオサンショウウオ生息地として鳥取県指定天然記念物に指定されています。



オシドリ

日野町に11月頃から3月にかけて飛来してくるオシドリは、全長45cm程度でオスの嘴は紅色で先端は白く、背中に立ち上がっている橙色の大きな羽は、イチヨウの葉のような形をしているので銀杏羽と呼ばれています。メスは全体が灰褐色で嘴は赤味を帯びた黒色です。白い目の回りの模様とそこからのびる白線が特徴です。湖沼、河川、溪流などに生息しており、北海道や本州中部より北で繁殖し、冬になると本州以南へ南下し、越冬します。食性は植物食傾向が強い雑食で、水生植物、果実、種子、昆虫などを食べます。

中菅の真砂土採取跡地に生息しているハッチョウトンボは、成虫が6月から8月頃に現れます。ハッチョウトンボは、日本では青森県から鹿児島県に至る本州、四国、九州に分布し、丘陵地の丈の短い植物が繁殖する湿地などで、日あたりが良く、モウセンゴケなどが生息している浅い水域が広がる環境を好みます。ハッチョウトンボの体長は約1.8cmで日本のトンボでは最小です。

### 植物

根雨神社社叢は根雨神社(新社殿)の社叢と元高尾神社(旧社殿。旧称八幡宮)社叢とを併せて構成され、鳥取県指定天然記念物となっています。旧社殿側の社叢はシイやモチノキ

林が形成され、新社殿側ではシラカシやウラジロガンなどが見られます。聖神社は黒坂を支配した福田氏の氏神とされた神社で、その社叢としてシラカシ、ウラジロガンを中心に自然性の高い樹木が保全されています。両神社社叢は、日野郡内でも数少ない常緑林としての極相を保持しています。

荒神原のオオサンショウウオ生息地は、昭和48(1973)年の調査で98匹を確認、その後の調査でも幼生や卵も見つかり、オオサンショウウオ生息地として鳥取県指定天然記念物に指定されています。

日野町内の主な希少植物として、鵜ノ池周辺に生育しているオトコゼリ、中菅滝山公園のハマハナヤスリ、中菅のマツラン、カヤラン、久住のサクラソウ、ミズトンボ、ミヤマウメモドキ、金持に数本残っているヨコグラノキ、板井原に数個体生育しているカリガネソウなどがあります。

## 地質鉱物

日野川の両岸一帯は、白亜紀後期から古第三紀の花崗岩から成り、本郷では大きく蛇行しています。この蛇行地点は寝覚峡と呼称され、谷幅が狭く、両岸は切り立って急崖となり、日野川流路により形成された地形が見られます。

日野川の河床から200m程高い標高440m前後の下榎・下黒坂の平坦な地形に、周囲約4km、深さ最大12mほどの「鵜ノ池」があります。この辺りは、もとは沼地でしたが、江戸時代に灌漑用の池とするために堤が築かれ、さらに昭和期に発電施設の貯水池となりました。

金持の後谷地域を流れる後谷川うしろ谷川の川床には、「根雨石」の俗称で呼ばれて庭石・盆栽の岩石として用いられる石があります。また、岡山県新見市に通じる明地峠付近の山腹には斑レイ岩が見られ、「三栗石」として珍重され、墓石や建築用石材として用いられています。



鵜ノ池

#### (4) 文化的景観

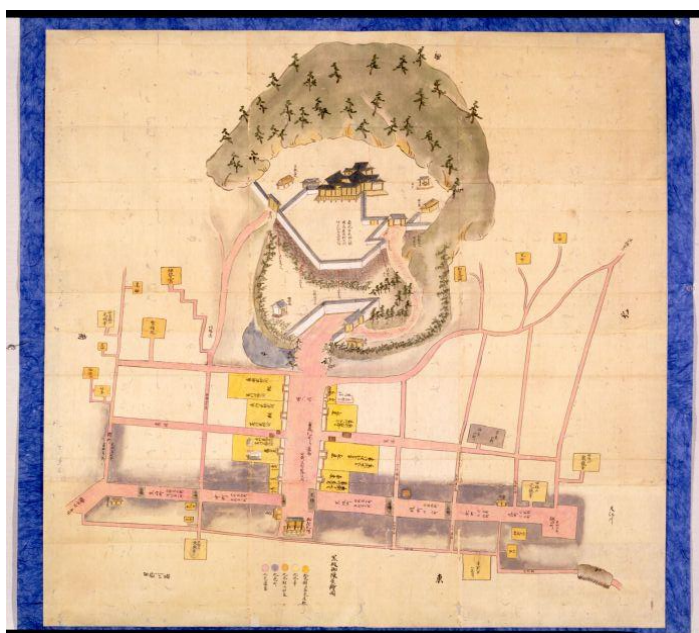
門谷の明地峠は標高 755m で国道 180 号が通り、岡山県新見市千屋花見へとつながっています。元弘 2 (1332) 年に後醍醐天皇が隠岐配流の際にこの地を通行したという伝承があります。明地峠の展望台からは奥渡地区の町や、大山、周辺の山々が一望できます。春または秋の夜明け前から早朝にかけては雲海が広がり、幻想的な自然景観が眺望できる場所です。



明地峠から望む雲海と大山

たたら街道は国道 180 号線付近の上菅の入り口から都合山たたら跡に通じる約 2.5km の街道で、たたら場への砂鉄や木炭などの搬入や、製品の搬出に利用されました。街道に沿って流れる都合谷川近くには砂鉄採取場の跡が残ります。また河床には都合山たたらで製錬した際に排出された鉄滓が数多く見られます。

黒坂は関一政の入部、鳥取藩の陣屋設置により、城下町・陣屋町として発展してきた町です。JR 黒坂駅西側にそびえる山に黒坂城址が、その山麓曲輪跡に鳥取藩政期福田氏の陣屋跡があります。駅前広場からは陣屋の様相を偲ばせる石垣がよく見えます。福田氏統治期の黒坂町について『黒坂御陣屋之図』によれば、黒坂駅前通りにあたる陣屋正面の道は、道幅 6 間 (約 10m) と記載されています。現在でも黒坂の町中で一番広い通りとなっており、その面影が見られます。この黒坂駅前通り沿いには黒坂支配の福田氏



黒坂御陣屋之図 (鳥取県立博物館蔵)

家臣や藩組士の屋敷が連なって殿町<sup>とのまち</sup>と呼ばれ、つきあたりには御制札場がありました。この殿町通りの道と交わり、町を南北に縦断する道筋には郡町<sup>こおりまち</sup>、生山町<sup>しょうやままち</sup>、中町<sup>なかまち</sup>、黒坂町<sup>くろさかまち</sup>、榎町<sup>えのきまち</sup>、北町<sup>きたまち</sup>、落町<sup>おちまち</sup>、鍛冶町<sup>かじまち</sup>が整備され、町家が建ち並んでいました。さらに町の周囲には寺院があり、北側に泉龍寺、光徳寺、正法寺、南側に光西寺、光明寺が点在しています。泉龍寺は関一政創建とされ、光西寺は福田氏の檀那寺となっています。また、町の南側に鎮座する聖神

社は、尼子氏や毛利氏などから崇敬篤く、関一政も神領寄進などを行い、福田氏は城内の氏神とするなど、黒坂の町の形成などに関係しています。このような黒坂城址・陣屋跡、町割りや社寺などは現在の町の端々に見られます。

## (5) 伝統的建造物群

### 出雲街道・宿場町

出雲街道の整備により、本町域では主に根雨と板井原に宿場が発達しました。根雨にはお茶屋など、かつての宿場町の風景が所々に残されています。出雲街道旧道とされる道は現道より道幅が狭く、また、根雨の町中の入り口に見られるクランク状の道路は、本陣のある宿場の見られる「枿形」の名残とされます。日野川を挟んだ対岸の舟場にも出雲街道旧道が伝承し、いずれも道幅は狭く、街道沿いには松江藩参勤交代の休憩所を提供したとされる佐々木家住宅があります。



出雲街道の風景（根雨）



出雲街道の風景（舟場）

(6) その他 (ジゲのたから)

方言

日野町に残る方言や言い回しなどについて、地域団体の奥日野ガイド倶楽部によって収集され、『日野ことば』としてまとめられています。これらの言葉は日野で生まれ育った人や日野で生活をしている人により日常的に使用されており、当地域の人々の暮らしや文化などを感じることができる大切なものです。

表2-3 『日野ことば』に収録されている方言や言い回し (抜粋)

語【品詞】	意味・状態	用例
あぁ【動】	ある／存在する	そこにーがな
	会う／合う／遭う	きょうーけえな
いぬう【動】	帰る／去る⇔くう	もうーだか
えらい【形】	苦しい／たいへん／ とても／ものすごい	ー雪になったなあ
がえに【副】	たくさん／ひどく →よおけ	ーあったわあ
きゃあせん【連】	来はしない	どおせーで
じげ【名】	地元／所属する地域	今日はーの祭りだ
そげ ①【感】 ②【助動】	① (相手の言に同意・ 肯定して) そうだ／そ の通りだ ② そのように／それ ほど／そんなに →そげえ	① そうそうーだけえ ② ー言われてもなあ
そさね【名】	うたた寝／仮眠	ーせずに布団で寝え
たて・る【動】	障子や襖を閉める	障子をー・てごせえ
てご【名】	手伝い (人) / 手助け (人)	わしがー・しょおか
まげな【形】	うまそうな	こりゃあーなあ
め・ぐ【動】	こわす／両替する	家をー
よお【副】	よく／たびたび／ま ともに／うまく	ー分からんわあ

## 伝承・伝説

地域にはさまざまな伝承・伝説が残っています。

根雨のカラト岩の伝説は、雲に乗って下界を見下ろしていた神様が土地の造成のために大きな石を投げ下したところ、宝仏山の頂上に落下して、その勢いでさらに山裾を流れている板井原川東岸に転び落ちたというものです。昭和9（1934）年の室戸台風の際に板井原川は氾濫しましたが、カラト岩が流水をせき止めて水害から守ったということです。また、この岩の付近にはかつて狐が住んでいて通行人の提灯の火を吹き消し、油揚げや鯖などをさらっていましたが、周辺の樹木が伐採されると住むところを失い、女性に姿を変えて大阪に女中奉公に出て、山陰からの旅人に対していつでも「根雨のカラトの山には木が生えましたか」と聞いていたといわれます。

黒坂・小河内近くを流れる日野川の畔にカワコ岩の伝承が残されています。カワコとは河童のことで、黒坂付近の日野川淵に住んでいたカワコが一匹の馬を見つけて、珍しい獲物とばかりに近づいて捕えようとする、馬のいななきに気づいた近くの光明寺の和尚が現場に急行し、カワコをこらしめたというものです。和尚は付近にそそり立つ岩にカワコの像を刻み、「お前の姿



カワコふれあい公園に立つカワコ像

がこの岩から消え去るまでは、どんなことがあっても水から出てはならぬ」とカワコに言いつけました。水中で退屈なカワコは毎晩岩の姿を消そうとしたがなかなか消えず、とうとう断念してどこかへ逃げ出してしまったということです。

このカワコ岩の伝承は黒坂住民に広く認知され、黒坂に隣接する日野川河川敷の公園はカワコふれあい公園と呼ばれて、さまざまなイベントに利用されています。